はじめての
万葉集【vol.90】
日本に現存する最古の和歌集「万葉集」をわかりやすくご紹介します

わが背子を 何時そ今かと 待つなへに 面やは見えむ 秋の風吹く

藤原宇合　巻八（一五三五番歌）

訳　恋する人を、いつだろう、今来るかと待つままに、はたしてお顔を見ることなどあるのだろうか。いたずらに秋の風が吹くことよ。

秋の風吹く

この歌は、藤原不比等の三男である藤原宇合が詠んだ歌です。宇合は遣唐副使や常陸守、式部卿、知造難波宮事、参議、西海道節度使などを歴任した律令官人で、式家の祖としても知られています。一方で、『万葉集』に短歌六首、日本最古の漢詩集『懐風藻』に漢詩六首を残す歌人・詩人でもありました。

今回の歌は『万葉集』巻八、秋の雑歌に収められています。巻八は季節ごとに雑歌・相聞に分けられており、雑歌は風物を詠むもの、相聞は恋情を詠むものです。今回の歌は一見、雑歌ではなく相聞に思えます。

「わが背子」は男性同士で用いることもありますが、女性から男性へ親愛の情をもって用いる例が大半です。「面やは見えむ」の「やは」に不安が示されており、秋の夜、男性の訪れを待つ女性の姿が想像できます。

改めて考えると、この歌は女性の立場で詠まれています。宇合の歌には、他にも女性の立場で詠んだもの（一七三〇番歌）があり、いずれも宇合が虚構として創作した歌と考えられます。

また、宇合は漢詩文に素養がありました。秋風が吹く中、女性が男性の訪れがないことを閨房（寝室）で嘆く詩が『玉台新詠』など中国の宮廷詩にいくつも見られます。宇合はそのような知識を利用して、「秋の風」にふさわしい和歌を創作したのではないでしょうか。

また、「秋の風吹く」歌は、相聞にもあります。巻八、秋の相聞は、額田王が天智天皇を思って詠んだ「君待つとわが恋ひをればわが屋戸の簾動かし秋の風吹く」（一六〇六番歌）から始まります。相聞ばかりを収めた巻四にも同じ歌（四八八番歌）があり、秋の相聞の代表といえる歌です。額田王の歌の「秋の風」は訪れの前兆とも解され、恋情に中心があります。一方、雑歌に収められた宇合の歌では、むなしく吹く「秋の風」そのものに中心があると言えそうです。

（本文　万葉文化館　阪口由佳）

万葉ちゃんの つぶやき

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ！

朱雀門ひろば（奈良市）

藤原宇合は遣唐副使として遣唐船で唐に渡りました。平城宮跡歴史公園の朱雀門ひろばには、復原された遣唐使船が展示されています。

朱雀門ひろばには他にも「平城宮いざない館」「天平みつき館」「天平うまし館」「天平みはらし館」「天平つどい館」などがあります。

所 奈良市二条大路南4-6-1
問 県営平城宮跡歴史公園（平城京 再生プロジェクト）
☎0742-35-8201